

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、9月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（9月）

令和8年8月31日
愛媛県

1 予報の概要

作物名	病害虫名	発生量	その他
水稻	いもち病(穂いもち)	並	
	紋枯病	並～やや多	
	トビイロウンカ	並～やや多	
	斑点米カメムシ類	並～やや多	
大豆	ハスモンヨトウ	並～やや多	
果樹共通	果樹カメムシ類	やや多～多	飛来時期：やや早～早
かんきつ	かいよう病	やや少～並	
	黒点病	やや少～並	
	ミカンハダニ	やや多～多	
	ミカンサビダニ	並～やや多	
かき	炭疽病	やや少	
	うどんこ病	やや多	
	フジコナカイガラムシ	やや少～並	
夏秋きゅうり	黄化えそ病	並～やや多	
	炭疽病	並	
	褐斑病	並	
いちご育苗床	炭疽病	やや少	
	アブラムシ類	やや少～並	
	ハダニ類	やや多～多	
	ハスモンヨトウ	やや少～並	
さといも	アブラムシ類	並～やや多	
	ハダニ類	やや多～多	
	ハスモンヨトウ	並～やや多	
夏秋野菜全般	ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ オオタバコガ	並～やや多 やや多～多 やや少～並	

※発生量は、対平年

2 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報（令和8年8月20日発表）の解説

向こう1か月の天候の見通し 四国地方（8月22日～9月21日）

【1か月の平均気温・降水量・日照時間】

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低 10 並 20 高 70% 高い見込み	少 40 並 40 多 20% 平年並か少ない見込み	少 20 並 40 多 40% 平年並か多い見込み

【予報のポイント】

・7月から暖かい空気に覆われ、気温の高い状態が続いています。今後1か月程度も、暖かい空気に覆われやすいため気温の高い状態が続く見込みで、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

- ・7月から高気圧に覆われやすく、降水量の少ない状態が続いています。今後2週間程度も、湿った空気の影響を受けにくい状態が続く見込みで、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。

3 病害虫の発生予想

水 稲

(1) いもち病（穂いもち）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、やや多の発生である。

(イ) 8月1～20日のBLASTAMによる葉いもち感染好適条件出現の判定では、感染好適日・準感染好適日が8月17日頃に複数地点で認められている（病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生に抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 出穂期防除を実施する。特に、葉いもちの発生が上位3葉まで認められる圃場では、穂いもち発生のリスクが高いと見込まれるため、出穂期防除を行い、天候不順が続く場合には、出穂10～15日後の仕上げ防除時にも、本病に効果のある薬剤を追加する。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では平年並の発生である。

(イ) 普通期の茎数は、平年に比べ多い。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 出穂後は株内湿度が高まりやすいので、発病状況を観察し、上位進展が認められる場合には早めに追加防除を実施する。

(イ) 止葉から下位3葉の葉鞘に病斑を生じると収量に影響する。

(ウ) 薬剤防除は、薬剤が株元まで到達するように行う。

(3) トビイロウンカ

(令和8年8月27日付け令和8年度病害虫防除技術情報（第5号）参照)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、早期水稻でやや多、普通期水稻では発生を認めていない。

(イ) 8月の広域調査では、早期122圃場中27圃場、普通期208圃場中2圃場で発生を認めている。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 出穂期防除を実施する。

(イ) 本虫は株元に寄生し、高温年には短期間に密度が高まり、収穫前に坪枯れを引き起こすことがあるため、下葉の枯死や田面の黄変などに注意する。

(ウ) 8月中～下旬の要防除密度は、払落しで10株当たり成幼虫数が30～50頭である。この密度に達した圃場では9月中旬以降に坪枯れの恐れがあるので、定期防除は必ず実施し、その後の発生動向に注意を払う。

(4) 斑点米カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査（普通期）では、本田での発生圃場率は平年並、掬取り虫数は多である。畦畔雑草では、発生地点率、掬取り虫数とも平年並の発生である。

(イ) 8月の予察灯による斑点米カメムシ類の誘殺状況は、6カ所中1カ所で平年より多くなっているが、他は平年並以下である（病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 要防除密度（本田乳熟期の捕虫網による20回掬取り虫数）は、大型種は1頭、小型種は3頭である。

- (イ) 水稻の依存性が高いイネカメムシ、ミナミアオカメムシ、クモヘリカメムシは本田内で繁殖するため、出穂以降も圃場観察に努め、発生を確認した場合は早急に防除を実施する。
- (ウ) 防除は地域の防除指針に基づき、乳熟期～糊熟期（出穂期から10～15日）を目安に実施する。
なお、その後も多発する場合は、薬剤の収穫前日数を遵守しながら、7～10日後に追加防除を実施する。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、葉では平年並、果実では平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病果や発病枝葉は早期に除去し、園内の病原菌密度の低下を図る。

(イ) 強風により付傷すると発病が助長されるので、台風襲来前後の薬剤散布や防風対策を講じる。

(ウ) ミカンハモグリガの食害痕は病原細菌の侵入箇所となるので防除を行う。

(エ) 甘平、愛媛果試第48号、はれひめ等の罹病性品種は発生に注意する。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 枯死枝は早期に除去し、園外で適切に処分する。

(イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が200～250mm（または散布後30日）に達した時である。ただし、本病に対して罹病性が高い品種（せとか、河内晩柑、清見等）の散布間隔は、累積降水量150～180mm（または散布後25日）とする。

(ウ) 年内に収穫する品種では、収穫時期を考慮して薬剤を選択する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、寄生葉率はやや多、1葉当たり雌成虫数は平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。

(イ) 秋季は果実や葉裏への寄生が増加するので、薬剤はかけむらのないように散布する。

(4) ミカンサビダニ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 被害果はその後の発生源となるため、早期に除去し、適切に処分する。

(イ) 被害は局所的に発生しやすいので、園地観察を行い、発生を確認したら早急に防除する。

(ウ) 高温乾燥条件が続く場合は、11月頃まで加害が継続するので注意する。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、果実の発生はやや少である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 園地観察に努め、発病枝及び発病果実は早期に除去し、園外で適切に処分する。
(イ) 果実の感受性が高まる時期となるので、常発地では定期防除に努め、天候不順が続けば追加防除を実施する。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 8月の巡回調査では、やや多の発生である。
(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
ウ 防除上の注意
(ア) 気温の低下とともに葉裏に白色粉状の菌叢を生じてくるので、防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるように散布する。

(3) フジコナカイガラムシ

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

- (ア) 8月の巡回調査では、やや少の発生である。
(イ) 第2世代の発生期に果樹カメムシ類の防除を行った園地では、リサージェンスにより多発することがあるので注意する。
(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや助長的である。
ウ 防除上の注意
(ア) 発生の多い園地では、8月中～下旬の防除時期に散布を行った3週間後に2回目の防除を行う。
(イ) 本虫はヘタと果実の隙間に多く寄生するため、薬剤が十分付着するように散布する。

果樹共通（かんきつ、かき、キウイフルーツ）

(1) 果樹カメムシ類

（令和8年8月18日付け令和8年度病害虫発生予察注意報（第3号）参照）

ア 予報の内容 発生量：やや多～多 飛来時期：やや早～早

イ 予報の根拠

- (ア) 県内のトラップでの8月上中旬の誘殺状況は、予察灯9か所中8か所、集合フェロモン5か所全てで平年より多くなっており、全県での誘殺数は予察灯で平年の1.7倍、集合フェロモン3.2倍となっている（病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。
(イ) 県内12カ所のヒノキ球果の結実量は平年並である（表）。
(ウ) 主たる増殖源であるヒノキ球果での口針鞘数は、新成虫離脱の目安とされる1球果当たり25本を超える場所が調査12か所中3か所で認められ、すでに複数の場所で離脱が始まっているものと推測される（表）。
(エ) 気象予報では、気温は高い見込みとされていることから、本虫の活動は平年よりも活発とみられ、園地への飛来に助長的である。
ウ 防除上の注意
(ア) 飛来時期、飛来量は地域、園地により異なるため、早期発見に努める。
(イ) 主に山林から園地に飛来するため、山林に近い園地での被害が多い傾向にある。
(ウ) 園地への飛来は、曇天で夜温があまり下がらない日の日没30分後～3時間後に多くなるので、防除はそれが想定される日の夕方が効果的である。
(エ) 飛来した成虫は集合フェロモンを放出し、同種の成虫を引き寄せるため、飛来初期の防除が重要である。
(オ) 台風等による強風雨後、園地への飛来が急増する事例があるため注意する。
(カ) 飛来が続く場合は継続的な防除が必要であるが、ミカンハダニとカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス）が起こる可能性があるため、散布後の発生には注意する。

表 ヒノキ球果 調査結果（８月）

調査地	ヒノキ 球果 結実量	10回掬取り 虫数							口針鞘数 ／ 球果
		チャバネアカカメシ		ツヤアカカメシ		クサギカメシ		合計	
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
四国中央市土居町天満	中	0	0	0	0	0	0	0	12.50
西条市丹原町川根	中	1	3	0	0	0	0	4	15.80
今治市菊間町西山	中	3	0	1	0	0	0	4	19.95
今治市玉川町河之内	多	1	0	1	0	0	0	2	16.10
松山市栗井	中	0	0	0	0	0	0	0	27.50
久万高原町明神	多	0	0	0	0	0	0	0	11.40
砥部町鷺ノ崎	多	0	0	0	0	1	0	1	27.00
伊予市双海町高岸	やや多	0	1	0	0	0	0	1	28.15
内子町五十崎	やや少	1	0	0	0	0	0	1	8.50
宇和島市柿原	中	1	0	0	0	0	0	1	24.80
西予市宇和町西山田	やや多	1	0	0	0	0	0	1	13.05
愛南町城辺緑	少	1	0	0	0	0	0	1	14.15
今年の平均値		0.75	0.33	0.17	0	0.08	0.00	1.33	18.24
平年値		1.30	0.71	0.10	0	0.16	0.01	2.15	5.28
今年の順位		7	6	2	7	5	7	7	1

野 菜

(1) 黄化えそ病（夏秋きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では平年並の発生、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生はやや少である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、媒介虫の発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。

(イ) 発生圃場の栽培を終了する場合は、きゅうりの株元を切断して枯死させ、保毒虫が長期間残存しないようにする。

(ウ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。

(エ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。

(2) 炭疽病（夏秋きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 窒素質肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去し、適切に処分する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(3) 褐斑病（夏秋きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 草勢を低下させないように努める。

(ウ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(エ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(4) 炭疽病（いちご）

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 8月中～下旬の広域調査（育苗床）ではやや少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉柄や小葉に病斑が見られる株や萎凋株は徹底して除去し、感染源を圃場外に持ち出し、適切に処分する。

(イ) 不要な下位葉や古葉は除去し、株内の湿度を下げる。

(ウ) 雨滴や灌水の飛沫とともに胞子が飛散するので、灌水時には水滴が跳ね上がらないよう注意を払う。また、夕方遅くの灌水は避ける。

(エ) 過繁茂にならないよう追肥量に注意する。

(オ) 発病してからでは防除効果が劣るので、定期的な薬剤防除に努め、薬液が葉裏までかかるように散布する。特に、降雨後に被害が拡大するので、降雨前に防除を行う。

(5) アブラムシ類（いちご、さといも）

ア 予報の内容 発生量：いちご やや少～並
発生量：さといも 並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、いちご育苗床はやや少、さといもは平年並の発生である。

(イ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は、3か所とも平年より少なく推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

(イ) 定植時にアブラムシ類に登録のある粒剤を施用するとともに、シルバーポリマルチ等の物理的防除を行う。

(6) ハダニ類（いちご、さといも）

ア 予報の内容 発生量：いちご やや多～多
発生量：さといも やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、いちご育苗床、さといもともにやや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

(イ) 同一薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(ウ) ハダニ類は雑草でも繁殖するので、圃場内外の除草に努める。

(7) ハスモンヨトウ（いちご、さといも、大豆、夏秋野菜全般）

ア 予報の内容 発生量：大豆 並～やや多
発生量：いちご やや少～並
発生量：さといも 並～やや多
発生量：夏秋野菜全般 並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月の巡回調査では、発生はさといもは平年並、いちご育苗床ではやや少の発生である。

(イ) 8月の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、7か所中3か所で平年より多く、1か所では少なく推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(イ) ふ化～若齢幼虫の分散前の加害葉（大豆では白変葉）の除去に努める。

(8) シロイチモジヨトウ（夏秋野菜全般）

ア 予報の内容 発生量：夏秋野菜全般 やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 8月の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、5か所中3か所で平年より多く推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ない見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(9) オオタバコガ（夏秋野菜全般）

ア 予報の内容 発生量：夏秋野菜全般 やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 8月の夏秋トマトの巡回調査では、平年並の発生である。

(イ) 8月の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、5か所とも平年より少なく推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは、<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojou/>

【農薬使用時の注意】

◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。

◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。

◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。

◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。

◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。

◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。

◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。

◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。